

# 増えるスーパーマーケット

## —プノンペン(カンボジア)における、食品販売事情—

1991年の国際連合カンボジア暫定統治機構(UNTAC)設置後、カンボジアは急速な復興を遂げ、首都プノンペンには多くの商店が店を開き、様々な商品が売られるようになっていきます。

カンボジアの人口1300万人のうち、1割の130万人がプノンペンに住んでいますが、各国からの援助関係者や観光客など、数多くの外国人も滞在しています。ここで、プノンペンにおける最近の食料品販売事情について書いてみたいと思います。



パラゴン・カンボジア・ショッピングセンター

プノンペン市民の多くは、一般の市場を使っています。生鮮食料品が安く手に入りますし、トゥック・トレイ(魚醬)など普段使う調味料なども売られているので、加工食品を特に必要としなければこれで十分なのです。また日本の地方にあるような「よろず屋」のように、小さな個人商店が、雑貨や食品、酒類などを扱っていることも少なくありません。プノンペンには、このような旧来型の販売店が数多く並んでいます。



市場で大量に仕入れた商品を運ぶ(オルセイ市場)

このような商店は、同じように街中にある小さな問屋や街に何ヶ所かある大きな市場で商品を調達し店頭で販売します。問屋や市場には、仲買人たちが国境付近や国境を越えて運んできた商品があふれています。

プノンペン市内にある、オルセイ市場(Orussey market)には、仲買人たちが、国内海外を問わず



集めてきた商品が並んでいます。生鮮食品などは地元商品が多くを占めますが、加工食品については、そのほとんどがタイ、ベトナム、中国などから入ってきた外国製品です。カンボジア製の加工食品は、前述のトゥック・トレイや酢などの調味料、ドライフルーツ、一部の菓子類など、極めて限られています。市場での陳列方法は、持っている商品をとにかく多く並べるというもので、極めて雑然としています。このような商品の洪水の中から、購入する人はお店の人に聞くなりして商品を探さなければなりません。

有るものを、とにかく並べて販売(オルセイ市場)

古くからの販売方法が一般的なプノンペンですが、近年ミニマートやスーパーマーケットが増えてきました。これらは、冷房の効いた明るい店内で、陳列棚に商品を並べて販売するもので、多少近代的な雰囲気があります。当然ながら定価販売です。しかし、棚いっぱいと同じ商品を並べたり、売れ筋であるかないかに関係なく並べたりするなど、陳列に関してさほど考えないでいる店も多く、また、仕入れの関係からか欠品が多いのも日本とは違うところでしょう。



スーパーマーケットの店内

こんな中で、Lucky Supermarket という店は、日本と変わらない陳列方法を行っており、外国人も多く訪れていました。会社の人に話を聞いてみると、ディスプレイやレイアウトなどは、実際に海外のスーパーなどを何度も訪れたスタッフが自ら勉強して実践している由。また物流に関しても、店舗での売れ筋商品や今後売れそうな商品（お客さんからのリクエストなど）を考え、独自ルートで直接買い付けをおこなっているとのこと。カンボジアでの物流・小売の世界では、極めて珍しいビジネス形態をおこなっている会社です。



CEDAC SHOP

外国産品が売り場に氾濫していると書きましたが、その中からカンボジア産品を見つけ出すのは難しいものがあります。それくらい、カンボジア産品の比率は低いわけですが、いくつかの店舗では Made in Cambodia コーナーを設けているところもあります。また、カンボジア産品だけを集めて販売している店もでてきています。

その中の一つに、CEDAC(Cambodian Center for Study and Development in Agriculture: カンボジア農業開発研究センター)という NGO があります。



CEDAC SHOP 店内

この NGO は、CEDAC SHOP というカンボディア産品だけを集めた店を運営していますが、取り扱っている商品は、お酒、酢、砂糖など、パルミラヤシで作った商品やトゥック・トレイなどの伝統的産品、ジャム、ドライフルーツやジュースなどの果物加工商品、米や乾燥麺といった主食類、さらにピーナツバターやピザソースといった欧米的な商品などが売られています。

さて、日本だとスーパーマーケットというのは、大量仕入れで安く売るといったイメージが強いかと思いますが、カンボジアのスーパーは決して安売り店ではありません。むしろ、近代的な売り場で売られるために、その分値段が高くなる傾向にあります。例えば、市場で1000リエル（約25円）で買



ミニマート

えるパルミラヤシの酢が、スーパーでは1500リエル（約38円）するといった具合です。そのような価格的なハンディはありますが、一定の収入を得られる人の中には、スーパーマーケットは快適に買い物ができる場であるとして、着実に定着しつつあります。今後、展示方法や仕入れ方法が先進国に近づいていくのか、また、物流システムがきちんと構築されて、コンビニエンスストアのように余剰在庫を置かない店が出現するのかが興味深い点です。